

# タイ大洪水による稲作被害とその後

主任研究員 室屋有宏

## 1 洪水によるコメ被害

昨年タイの大洪水は、チャオプラヤ川流域を中心に甚大な被害をもたらした。特に10月以降、日系企業が集積するアユタヤ県等で幾つもの工業団地が水没、首都バンコクでも一部冠水する事態となり、日本のメディアも連日これを報道した。

チャオプラヤ・デルタを擁するタイ中部は同国最大の穀倉地帯でもあり、今回の洪水ではコメを中心に大きな被害が発生した。昨年時点で政府が発表したコメ被害予想は600万トンに達し、これは例年の年間生産量約3,100万トンの約2割にあたる大きなものだった(タイの統計では生産は籾ベース、精米換算率は66%)。

ただし年明け後の農業省米局の発表では、被害数量は450万トンに修正され、雨季作全体(4月~10月)の生産量に関しては、中部に次ぐ大産地である東北部が洪水被害を受けず豊作であったこと等から、洪水前予想の2,434万トンから2,036万トンへと約400万トンの減少に変更されている。

## 2 洪水被害の背景

今回の洪水発生の直接的原因としては、昨年は短期間に大きな台風が5~6個到来し(例年は2つ程度)、多量の降雨からチャオプラヤ川に流れ込む4つの主要ダムの許容量を超えたためであった。またダムからの放流タイミングが遅れたことが、結果的に下流域の工業団地、バンコク等での被害を大きくした原因だと指摘されている。

昨年の8月時点では、中部では収穫前のコメが多く、ダムの放水を躊躇している間に、9月に入りさらに降雨があり最終的にダムの

許容量を上回り、大量の放水により下流の水門等を破損させ、大規模な洪水被害に到った。このように洪水被害の背後には、農業と非農業セクター間での水管理調整という難しい問題も含まれる。

タイの稲作は、もともとは天水依存の1期作であり、今回大きな洪水被害を受けたナコンサワン、アントン、アユタヤ県などは、灌漑される前は「洪水の通り道」(flooding way)と呼ばれ、浮稲(フローティング・ライス)が盛んな地域であった。

ところが中部においては、上流でのダム建設を通じて、特に80年代以降、灌漑面積が拡大し、連続的な稲作が可能な地域が広がった。現在、タイ全体の灌漑比率は25%ほどだが、灌漑整備はほとんど中部に集中している。

さらに中部では、ここ10年くらいの間に、農作業の機械化・外部委託や90日程度で収穫できる非感光性の早生種の導入とも相まって、2年5期作など農地の集約的利用が浸透した。

バンコクの北230キロにあるナコンサワン県、また北西90キロに位置するスパンブリー県の灌漑農村での聞き取りでは、両県とも雨季作、乾季作の2期作を前提に標準的な栽培スケジュールのようなものはあるものの(第1図)、水があるところでは農家が90~100日程

第1図 タイ中部での稲作スケジュール  
(灰色部分は洪水の多い期間)

	雨季作								乾季作							
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5		
ナコンサワン県	←→								←→							
スパンブリー県	←→								←→							

資料 ヒアリングに基づき筆者作成

度の作期で、自由に何回も栽培しているのが実情であった。

このように中部においては、従来作付けしていなかった地域、期間で稲作が連続的に行われるようになっていたことが、洪水による被害を大きくした一因といえよう。

### 3 洪水対策における課題

大規模な洪水被害の再発を回避する対策としては、稲作の連続的な作付けをやめ、本来の雨季・乾季に適合した作付け体系に戻すことが必要とされる。連続的な農地利用は、トビイロウンカなどの病気が多発するリスクを大きくし、農薬の多投入による生産コスト増や収獲変動が大きくなるなど、農業経営の不透明性を高める要因にもなっている。

タイのナレッジ・ネットワーク研究所のソンポン博士(元カセサート大教授)は、中部の稲作では2期作の栽培スケジュールを厳格化することと、稲作を行う地域と行わない地域のゾーニングの導入が必要と唱える。

雨季后半8～10月の洪水リスクを避けるために7月までに収穫を終え、その後農地を休ませ乾季作は11～12月に始める。また乾季作に必要な水をダムに早めに確保したうえで、8～9月は自然放水することで、大規模な洪水発生リスクを低減させるべきだと指摘する。さらに工業団地を囲む堤防も必要であるとする。

タイ政府は今後の水管理を議論するために1月に2つの委員会を立ち上げたが、この場で長期的、総合的な対策が打ち出されるかは不透明である。現政権は、農民層の支持獲得のため市場実勢を大きく上回る価格支持政策(担保融資制度)を再導入しているが、この政策はコメ生産の量的拡大・品質低下、土地利用の歪み、輸出競争力の後退をもたらし、自然環境と調和する農業と相容れないとの批判が根強くある。



資料 筆者撮影

### 4 乾季作の増産から通年では豊作予測も

現在タイは乾季作に入っているが、水が豊富にあること、洪水後は土壌養分が増えること、政府の価格支持水準が高いこと等から、例年の乾季作生産量900万トン弱を大幅に上回ることが予想されている。

写真はスパンブリー県の稲作地帯で1月13日に撮影したものだが、道路を境に手前の圃場では乾季作の作付けが終了しているが、向こう側は全面的に水に浸かっている。この地域では通常1月中に作付けを終えるが、洪水の影響で遅れており、地元農家の話では水が退くのは2月末までかかるのではないかとのことだった。それでも灌漑地域は基本的に作付けが年中可能なため、遅れは出るが水が退いた時点で植え直しを行い、年間生産量をリカバーすることができる。

米局では乾季作予想を約100万トン上方修正し1,111万トンと発表、2011/12年トータルの生産量では3,147万トンと予測している。これは前年度の3,320万トンに比べ、173万トン(精米換算で113万トン)、率で5%程度の小幅な減少である。今乾季作については、政府予想を上回り通年では「豊作」を見込む機関もあり、コメの国際市況が軟化するなか、生産の半分が輸出向けであるタイの稲作は新たな問題に対処する必要性が強まっている。

(むろや ありひろ)